

## 「脳内ニューヨーク」

\*\*\*

2009（平成21）年10月19日鑑賞<アスミック・エース社内DVD試写>

監督：チャーリー・カウフマン

ケイデン・コタード（人気劇作家）／フィリップ・シーモア・ホフマン

ヘイゼル（劇場の受付嬢、ケイデンが生涯かけて愛する女性）／サマンサ・モートン

クレア・キーン（ケイデンの2番目の妻、人気舞台女優）／ミシェル・ウィリアムズ

アデル・ラック（ケイデンの妻、個性派画家）／キャスリーン・キーナー

タミー（ヘイゼルを演じる舞台俳優）／エミリー・ワトソン

エレン・パスコム（アデルの家政婦）

ダイアン・ウィース

ミリセント・ウィームズ（サミーの後、ケイデンを演じる舞台俳優）

マリア（自由奔放なアデルの親友）／ジェニファー・ジェイソン・リー

マドレーヌ・グラヴィス（ケイデンのかかりつけカウンセラー）／ホープ・デイヴィス

サミー・バーナサン（ケイデンを演じる舞台俳優）／トム・ヌーナン

4歳のオリヴ（ケイデンとアデルの娘）／セイディ・ゴールドスタイン

大人になったオリヴ／ロビン・ワイガート

2008年・アメリカ映画・124分

配給／アスミック・エース

### <天才脚本家の頭の中は？>

『マルコヴィッチの穴』（99年）や『エターナル・サンシャイン』（04年）の脚本を書いたチャーリー・カウフマンは「天才脚本家」と呼ばれているが、そんな彼がはじめて監督・脚本・製作したのが本作。チラシには「失敗つづきで開き直っちゃったケイデンは、自分の頭の中にあるNYを本物のNYの中に作りはじめる。」とある。そして予告編でそのイメージを観たが、こりゃ一体何？ サッパリわからない。しかし、本編を観れば当然わかるはず、そしてチャーリー・カウフマン監督の頭の中をじっくりのぞけるはず。

そう思って試写室へ行ったが、やっぱり天才脚本家の頭の中を凡人がのぞくのは至難のワザ？

### <どんな物語からスタート？>

物語は一人娘オリヴ（セイディ・ゴールドスタイン）がまだ小さい女の子の頃からスタートする。ケイデン・コタード（フィリップ・シーモア・ホフマン）とアデル・ラック（キャスリーン・キーナー）夫婦の雰囲気は何となくヤバそう。また、オリヴのウンチの色がヘンなら、ケイデンのそれもヘン。そしてケイデンの顔には湿疹が出るわ、医師にかかるアレコレ宣告されるわとなったから、人気劇作家として日夜製作に励んでいるケイデンも大変。そんな中、しばらくの間ドイツへ行くと言ってオリヴを連れて親友のマリア（ジェニファー・ジェイソン・リー）と共に旅立った個性派画家の妻アデルは、予定どおり（？）ドイツに居ついたまま、事実上の別居生活を開始した。孤独に打ちひしがれたケイデンは、彼に好意を寄せる劇場の受付嬢ヘイゼル（サマンサ・モートン）からのモーションに応えることすらできず、失意の毎日を送っていたが・・・。

そんな物語からスタートする本作は、ここらあたりまでは十分理解できる。しかし、そこから先は？ プレスシートの中の「REVIEW」で「この映画は最低2回観るべき」と書かれていたし、「プロダクションノート」で「あまりにも内容が豊富なため、1度観ただけで全てを理解しようとするのは大きな挑戦であり、不可能に近い」と書かれているが、私もそれに同感。もっとも、2度、3度観ようという熱意をもてるかどうかは、あなた次第？

### <時間軸が？登場人物が？>

失意の中でケイデンが思いがけず受賞したのがマッカーサー・フェロー賞、別名“天才賞”だ。腹の出っ張ったショボいおっさんのように見えていたケイデンは、やはり相当な実力を持った劇作家だったわけだ。そんなケイデンが賞金のすべてをつぎ込んで目指すのは、現実のニューヨークに自分の頭の中にある“もうひとつのニューヨーク”を作り出すという前代未聞のプロジェクト。

といっても前述のとおり、その内容が私にはイマイチわからない。ケイデンのプロジェクトにはたくさんの俳優たちが集まり、連日稽古が続けられているようだが、問題はいつ上演できるのかということ。映画を観ていると、いつの間にか小さい娘だったオリヴが全身タトゥーを入れた大人のオリヴ（ロビン・ワイガート）に変身しているし、ケイデンもどんどん老け込んでいく一方。そのうえ、ケイデンが追及している芸術と同じように、いつしか“もうひとつのニューヨーク”でケイデンを演ずるサミー・バーナサン（トム・ヌーナン）が登場してきたり、“もうひとつのニューヨーク”でヘイゼルを演ずるタミー（エミリー・ワトソン）が登場してきたり・・・。ことほど左様に、本作は時間軸が？そして登場人物が？

### <『ヴィヨンの妻』との共通点は？>

現在、第33回モントリオール世界映画祭で最優秀監督賞を受賞した根岸吉太郎監督の『ヴィヨンの妻』（09年）が話題を呼んでいる。そんな中、2009年10月20日付読売新聞には作家の角田光代氏の「映画『ヴィヨンの妻』を観て」という記事があったが、その見出しは「弱い彼 まるで私たち」。つまり浅野忠信扮する太宰の分身たる大谷は「大酒飲みで気障（きざ）で卑怯で、猜疑心と嫉妬心が強く、小心で臆病」な詩人だが、この映画を観る側は、「この弱い詩人の内に自分の姿を見る」ということだ。もっとも、それを見て「このちっともかっこよくない主人公にただひたすら嫌悪感を覚える」か、それとも「愛着を覚える」かは、あなた次第？

そんな意味でも、『ヴィヨンの妻』には人生とは？生きるとは？そして死とは？の意味がいっぱい詰まっていたが、実はチャーリー・カウフマンの初監督作品『脳内ニューヨーク』もそれは同じ？

### <本作に見る「人生いろいろ」とは？>

ケイデンは大谷以上に家族を愛しているし仕事も好きだから、決してダメ人間ではない。しかし、映画冒頭にもみるケイデンの姿はボロボロで何とも痛々しい限り。そんなケイデンは妻との長期の別居後、人気舞台女優だったクレア・キーン（ミシェル・ウィリアムズ）と2度目の結婚をしたが、その成り行きは？また、ある場所で偶然再会した、生涯をかけてケイデンが愛する女性ヘイゼルとの男女の仲の進展は？さらに、全身に彫られた花のタトゥーが細菌に感染して枯れてしまうのに伴って自分も枯れてしまった一人娘オリヴとの再会は？

そんな男女関係、親子関係をめぐるケイデンの人間模様は悲惨だが、それも人生？他方、ケイデンが生涯をかけて構想を練り、演出し続けてきた巨大な舞台の成否は？島倉千代子は『人生いろいろ』と歌い、小泉純一郎元総理も「人生いろいろ」と国会で答弁したが、本作を観ればそのことがよくわかる。さて、あなたは本作からそれをどんな風に感じ取るだろうか、そして、最後に訪れるケイデンの死をどう受けとめる？